Notes for Kanjinno Butaizakura (2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1026

金沢大学文学部論集　言語・文学篇
第二十二号　二〇〇二年　一～二六

『勧進能舞台桜』注釈（二）

時代物浮世草子研究会
（木越　治・高島　要
・高橋明彦・村戸弥生
・木越秀子・穴倉玉日）

【凡例】

一　本稿は、延享三年正月八文字屋刊行の浮世草子『勧進能舞台桜』（全五巻）の注釈である。今回は第二巻を扱う。

二　底本は、長谷川強他編『八文字屋全集　第十八巻』（汲古書院、一九九七年刊）に拠った。詳細な書誌情報等はすべてこちらを参照されたい。

三　本注釈に掲げる校訂本文の作成方針は以下のとおりである。

1　漢字は可能な限り現行の字体に直す。

2　底本の句読点はすべて「。」で区切られているが、適宜「、」「。」を区別する。

3　底本にない箇所でも、意味を取りやすいと思われる場合には、適宜「、」「。」「・」濁点等を補う。

4　人物の発言や心中思惟の部分には「　」を付す。

5　底本のルビはすべて生かすが、それ以外にもあった方が読みやすいと思われる箇所には適宜補う。

6　助詞の「共」、形式名詞の「事」等、仮名に開いたものがある。

7　全体として、日本古典文学を学ぶ海外からの留学生が、本文を読むことに関して抵抗を感じないような本文づくりをめざした。

四　注釈は簡潔をむねとし、できるだけ近い時代・近いジャンルの用例を掲げるように努めた。

五　用例本文は通行の字体を基本とし、ルビは必要と思われるもののみ（　）に入れて掲げた。

六　用例の出典表示は、〔近松・宵庚申〕〔秋成・妾形気〕など作者名を掲げるもの、〔咄本・喜美賀楽寿（安永六年刊）〕のようにジャンルと刊年を示すものなど一定していないが、あえて統一することはしていない。

七　各章の冒頭に、梗概を掲げた。

勧進能舞台桜　二之巻

目録

【校訂本文】

藤戸　狂言　清水

第一　取て引よせ二刀さしづめの偽
そのまゝ井戸に沈め切た思案の底
あのほとりぞと夕浪の深ひおはまり

第二　実や人の親の心は三十計の井堀
白化に似せをわたすは希代の例なれば
此皿をかくす程の礼に切とは奇異の思ひ

第三　七つ過れば出る怪物より上の工夫
鬼の面よりおそろしい大夫が手管に
のせられた刀の迷惑は貫左衛門が命

◇**藤戸**　巻二の下敷になっているのは、能の「藤戸」と狂言の「清水」であるが、「藤戸」の詞章の利用は特に二の二においてはなはだしい。二の三は例によって狂言から趣向をとったものであり、二の一は浄瑠璃『播州皿屋舗』（寛保七年七月十五日、為永太郎兵衛・浅田一鳥作、豊竹座上演、なお、注釈中における本文の引用は『日本音曲全集第十巻義太夫全集（下巻）』（昭和二年刊）所収の翻刻（「青山館」の段のみ収録）によった）によるところが大きい。「藤戸」は四番目物能。作者不明。前ジテは漁夫の母。後ジテは漁夫の怨霊。ワキである佐々木盛綱が藤戸先陣の功によって賜った備前の児島で、年たけた女（前ジテ）から息子を失った恨みを聞き、隠しきれなくなった盛綱は、浅瀬を教えてくれた漁夫を殺して海に沈めたいきさつを物語り、弔いをする。やがて、漁夫の怨霊（後ジテ）がやせ衰えた姿で現れ、殺されたときの苦痛を述べて盛綱に襲いかかろうとするが、結局は弔いの功徳で成仏するという内容である。なお、藤戸は地名で岡山県児島湾の西で水島灘に通じていた狭い水道にあった渡し場。現在は陸地となり、倉敷市内の一地域となっている。

◇**清水**　鬼山伏狂言。『狂言記』では「鬼清水」、『天正狂言本』・天理本では「野中の清水」。主が太郎冠者に水を汲んで来いと命ずるが、冠者は清水に鬼が出たと称し、主の秘蔵の手桶を捨てて帰る。主は桶を惜しんで清水へ行く。困った冠者は風流の面（武悪）を着けて主をおどし、冠者の待遇改善を要求する。本当の鬼が出たと思って恐しがって帰った主が鬼に出会った時の様子を冠者に聞くと冠者は大声でその場を再現する。主は鬼と冠者の声が同じことに気付きまた清水へ行く。冠者はまた面を着けて主をおどすが、面をとられ追い込まれる、という内容。

◇**取て引よせ二刀さしづめの偽、そのまゝ井戸に沈め切た思案の底**　「不便には存じしかども、とつて引き寄せ二刀刺し、そのまま海に沈めて帰りしが」〔謡曲・藤戸〕による。「藤戸」では浦の男が刺されるが、本作でそれに相当するのが腰元のふじという女である。なお、『播州皿屋舗』にも「取つて引寄せ蘇活の術、うんと気のつく鉄山が」とある。

◇**二刀さす**　刀で二度刺すこと。巻二の一本文には「取て引よせひざの下に引しき、あまりにくさのまゝ左のかいなをぶちおとしくるしませて、又右のかいなをきり」とある。謡曲「藤戸」の、刺された浦の男の亡霊の回想の場面で「あれなる。浮洲の岩の上に我を連れて行く水の。氷の如くなる刃を抜いて。胸のあたりを刺し通し。刺し通されれば肝魂も、消えくとなる所を」とある箇所では、両手をひろげ、太刀で左脇を二度刺す演出が行なわれている。

◇**あのほとりぞと夕浪の深ひ**　「あのほとりぞと夕波の、夜の事にてありしほどに」〔謡曲・藤戸〕による。

◇**おはまり**　井戸にはまる意と策略にひっかかるの意がかかっている。「おかか殿は六条参をさせましょと我物にして行は久七がはまり也」〔西鶴・五人女・二・三〕

◇**人の親の心は三十**　「げにや人の親の、心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ知られたれ」〔謡曲・藤戸〕による。典拠は「人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな〈藤原兼輔〉」〔後撰集・雑一・一一〇三〕。

◇**三十**　陰暦で、月の三十日は闇夜であるところから三、三〇、あるいは三〇〇をいう馬方、駕籠かきなどの符丁。ここは三十才の年齢を掛けたもの。「今いふ通りだから、三百（ヤミ）で能かア遣ますべい」〔滑稽本・狂言田舎操・上〕。

◇**白化**　しらばくれること。しらん振りをすること。「若旦那へおめ見へいたされと、白化に出らるれば、源之丞はかほをあからめ」〔其磧・風流宇治頼政・三・一〕

◇**希代の例なれば**　「昔より今に至るまで、馬にて海を渡すこと、希代の例なればとて」〔謡曲・藤戸〕による。

◇**七つ**　いまの午後四時頃。狂言「清水」に「七つ下がって清水へ参れば、元興寺（がごじ）とやらが出ると申しまするによって」とあるのによる。元興寺は鬼の異名。

◇**怪物**　「抑（そもそも）おん身は何処の人にて、這（この）怪物（ばけもの）等に捉（と）られしぞ」〔馬琴・美少年・三・一〕

◇**貫左衛門**　明石貫左衛門。家老明石梅軒の息子。一の三に既出。

○巻二之一

○取て引よせ二刀さしづめの偽

【梗概】

播磨国小嶋の餝間三郎左衛門の屋敷では、三郎左が病気になり、あんまのかるもに腰をもませている。彼の病気は腰元を斬ったためであり、屋敷には夜な夜な幽霊が出るとうわさされている。そこへ、赤松梅軒と加古川左近が家宝の皿を受け取るためにやってくる。三郎左は、先代の命令で家宝と同じ皿を十枚作ってあったこと、しかし、そのうちの一枚を藤という腰元が割ったため斬り殺したこと、その割れた一枚の皿が本物であることなどを語る。とりあえず、偽物の皿を京都に持参して継目の参内をすませばよいというちに九つの鐘が鳴り、それにあわせて井戸から女の幽霊があらわれ、三郎左もそのたたりのせいか苦しみ始める。その様子を見て梅軒は恐ろしくなり、九枚の皿を持って円山のもとへ向かった。

【校訂本文】

春の湊の行末や。藤戸をわたりし恩賞に賜りし児嶋といふは備前の国。引くらべて見れば、すり鉢と紙子程ちがふ播磨の内に小嶋の郷といふ所は、餝間三郎左衛門長能が知行にて、屋敷もありけるが、此頃は病気常ならず、養生の願ひかなひ、在所へ引て人にあはず医薬祈禱日夜おこたらねども、病気いさゝかも快気見えず。そのうへあやしき取沙汰はびこり、「三郎左衛門は故なき事にて腰元の女を手討にせしゆへ、その幽霊あらはれて、怪きことどもあり」と、たれいふともなく国中にひろがり、きのどくにこそきこえける。

表の方より案内して、「有馬円山様の御名代として、明石梅軒殿、加古川右近殿御出」とあれば、三郎左衛門此中より出入さする按摩取の老女かるもといふに足ひねらせていたりしが、はち巻しながら枕刀取り直し脇息にかゝり、按摩のかゝを次へたゝせ、両人を請じ入れければ、梅軒詞を出し、

「円山様仰せ出さるゝは、『三郎左衛門此間病気とて蟄居心もとなくおぼしめすに、世上にては様々の異説やみがたき故、今日も京都への御用かたぐ取りこみたれども、夜に入り、見まひ申す様に』との御意。それに付き『御先代より御預の玉の皿、三郎左衛門万一の事もありてはと御念入られ、我〳〵両人に請取まいる様に』との御儀」

といふに、右近も同く

「此間さまぐあやしき沙汰あるによりて、京都へ異説のひろがらぬ内に皿をさし上げらるゝ様にとの事」

とあれば、三郎左衛門

「是は〳〵夜中と申し御念入たる御意ども有がたく存じ奉る。拙者病気かやうに致し罷あれば、なにのかはりたる事もなく候へども、夜半に及ぶといなや、身ぶるひ立、それより性根をうしなひ申す事もこれあり。何ともがてんのまいらぬ病症と無念に存る」

よしを申せば、両人は「とかく玉の皿御渡しなされよ」と云に、「いかにも相渡し申すべし」

といふ内に、はや中の口の時計四つ半をしらせければ、

「ふるひつくも程有るまじ。さらば玉のさらをわたし申さん」

と病中ながら我居間のうしろのふすま引きあくれば、七重の壇をかまへ七五三縄うや〳〵しく、方壱尺ばかりの箱その員拾をならべたり。

「病気すね心に任せず。御両人是をおろし給はれ」

といふ故、拾箱ながらおろしてふたをとれば九箱に九枚の玉皿、今一箱をひらけば珊瑚珠みぢんにくだけ、皿の形はかげもなくて、たゞ鉄槌などにて打ちくだきたる様に見えける時、右近ふしんさふに

「御預の玉皿は一枚なるに、コハいかなる事ぞ」

ととへば、

「されば〳〵是にこそ子細のある事。大殿様の御在世のみぎり仰せわたさるゝは、『天下無双の宝物なれば、いかなる者が忍び入りてぬすむまじき物

でもなし。おなじ皿を九枚似せさせ置所を九所にわかち置くべし。をの〳〵しめを引き、まことの皿も一所におなじ格にしてをかば、しのび入るべきものも心どぎつき、残らず取らんとする内には見出されぬ事はあるべからず』と、深き御工夫。もつとも『この事、その方より外へは妻子とてもどれがまことのたからか、しれぬ様にしてをくべし」との儀にて、家内拾ケ所にうやまひ置きたる事なり。此にせの皿は鯨の牡丹骨を雪点草にて煮れば、条といひ色といひ珊瑚にまがはずといへども、真の珊瑚珠よりは軽ひばかりなれども、下地手に取て真の玉ざらを見ぬ眼で見わけられぬ細工。

この九枚は贋物にて、まことの一枚は此くだけし一箱」

と聞て両人びつくりし、「其まことの宝物がくだけては」といふを、三郎左衛門

「さればその事で御座るは。病中気づかひに存じ、残らず是なるたなへ上をかんと召つかふ侍どもにもかくさんため、身共はすねこし立ぬ煩ひゆへ、こしもとの女どもにはこばせしに、情なや是非もなや、九枚のにせ物は別条なく、真の宝を入れたるはこを、藤といへる女、小庭の土蔵よりあれなる飛石をこしざまに、小石につまづきどうどたをれし拍子に箱の紐きれて、内なる玉皿石にあたり、ソレその如くみぢんにくだけ、おどろひたと申さふか、肝がつぶれると申さふか、あまりの腹立にくだんの腰元をひざもとへ招き、九枚の皿を出し、かさねさせて『サア御主人より預りし拾枚の皿、をのれがぶちわつたるで九枚になり此皿をかぞへて見よ』ときめかゝれば、『麁相な事致しました」となみだをながししりごみするを『イヤサ数をよんで見よ』といふ時、ぜひなく一つ二つ三つとよみ九つとよみおはる時、『今一枚のかはりに』と取りて引きよせひざの下に引しき、あまりにくさのまゝ左のかいなをぶちおとしくるしませて、又右のかいなをきり、其後いまだ息のあるを、あのむかふなる井戸は自然の底なし、おちたる物のあがりたるためしなき名水ゆへ仲間どもに申し付けて、さかさまにしてつきはめさせしに『エゝきこえませぬ。麁相とは申しながら、ころさつしやれようも有るべきに、なぶりごろしとはあまりむごひ。此一念ほかへはまいらじ』と、それは〳〵おそろしひ黄なる声ともろとも、あれなるすゝきのすこしこなたの井戸のふかみに死骸をふかくかくせしなり」

とかたれば、両人は、「扨は人の申すも少もたがはざりけり。去ながらその分では両人まかりこし、此くだけたるは皿のくだけやらおじめを多くあつめてくだきし物やら証拠なし」とがてんせねば、三郎左衛門

「されば〳〵身共も切腹とは存たれども、此皿くだけたる故、三郎左衛門が腹切たるとあつては、円山様蔵人様のつぎめのしるしも立ちがたければ、何とぞ此にせ物の内にて御つぎめをすまさせ、其後は御さしづ次第に切腹も仕らんと、円山様を大切にぞんじて見合せまかりある」

とあれば、右近も

「いか様、今更まことの皿がくだけたと有ては、円山様の御望のさまたげとなるべし」

と、似せ物を白にかづかするとりもち口。梅軒もつぎめの妨といふに気が付き、「いかにも」といひたけれども、

「万々一真の宝物の皿がかくしてなどあつてはいかゞ」

と手をこまぬひて思案する内、又打ちかくる時計のしらせは九つと指おり、三郎左衛門は夜半になりしが

「アヽラくるしや」ともだへくるしみ、さま〴〵に身をもがけば頻に家鳴し、庭の井の内ばつともゆる火はまぼろし。女の声にて

「一つ二つ三つ四つ五つ六つ七つ八つ九つハアかなしやナウ」

と泣く声あはれにすさまじく、其こゑを聞きて三郎左衛門はうつゝのごとく、刀をつ取り

「をのれになやまさるゝが口おしや、むねんや」

とりきめどもあせれども、まなこすはりかたちすくみて

「アヽラくるしや〳〵」

と七顛八倒終にたへいり、汗をながして目を見詰歯をくひしばれば、両人さま〴〵介抱しそらおそろしく、

「さては三郎左が申すにちがひなく、皿をわりし女がたましゐ、井戸にのこりてわざはひをなすよな」

と梅軒こは〴〵庭におりて猶見届んと井筒によれば、右近も引そひ立よる時、ゑんせうくさきけふりと共にくはつともえる。火の底より尾上菊五郎が様な女声にて

「ヱヽ聞へませぬぞへ。なぜひと思ひにはころさつしやれぬぞ。くるしやノウ。一つ二つ九つハア」

といふ声の首筋もとへこたへて、さしもの梅軒「南無あみだ仏〳〵」とあともどりすれば、右近は

「是〳〵梅軒殿、とくと中をのぞひて吟味すまいか」

といへば、

「ばけ物にうでだてはふぐを丸焼にして喰も同前御無用〳〵」

と得心して

「ぶちわつたは不届なれども、この一念が円山様へまでかゝつてはきのどくじやほどに彼者の跡をも弔ひ、又はその一類もあらば世に立てやらせ給へ。九枚のにせ物のうちよひのを目利して円山様とも御相談申し、真の皿のわれたる噂外へはもれぬ様に致すべし。貴殿切腹ありてはお為にならず」

と、あの方から相対づくにて似せ物を受取帰りしなにも、よく〳〵さいぜんの井の内の声が気味わるかりしにや、梅軒立もどり

「これ三郎左殿、ころされたは取かへしのならぬ事。せめてはとむらはせ給へや。あととむらはせ給へや」

と念入いふてぞかへりし

◆**春の湊の行末や。藤戸をわたりし恩賞に賜りし児嶋**　「春の湊の行末や、春の湊の行末や、藤戸の渡りなるらん。これは佐々木の三郎盛綱にて候。さても今度藤戸の先陣を仕りたる恩賞に、児島を賜つて候。」〔謡曲・藤戸・冒頭〕による。

◆**児嶋**　岡山県岡山市。古くは海湾を隔てた離島であつたが、藤戸水道が陸地となつたので、現在は倉敷市と隣接する児島半島となつている。

◆**すり鉢**　すり鉢は備前の名産。「摺鉢は備前の土を最上とす」〔俳諧・本朝文選拾遺・摺鉢摺小木の弁〕「備前焼物之事（略）摺鉢等何も品々多し。○按ずるに、備前国に於て製する擂盆は、其質堅実にして容易に破損せず。其刻せる線条も、亦磨滅せずして久しきに耐ゆと云ふ」〔万宝全書・八〕。

◆**紙子**　紙子の産地としては仙台が有名だが、「其の外紙子の名物、肥後八代紙子、播磨紙子、紀州花井紙子、美濃十文字、大坂松下一閑紙子」〔日本山海名物図会・四〕などとあるように播磨でも名産であつた。

◆**播磨の内に小嶋の郷**　播磨の「こじま」は管見に入らない。例えば吉田東伍『大日本地名辞書』によれば、「小島郷」は武蔵・美濃に、「児島郷」は備前に見えるのみ。あえて架空の地名を用いたものであろう。

◆**快気**　病気が回復すること。「たとへいかやうなる大病にても。此住寺の祈祷にて快気せぬといふ事なし」〔浮世草子・新色五巻書・五・二〕

◆**取沙汰**　世間のうわさ。世上の評判。「Torisata　トリサタ　世間に流布する話。Torisata　suru.（取沙汰する）世間に流布していることなどについて語る。あるいは、話題にする。」〔日葡辞書〕「さりとてはしらぬ事ながら、人はそれとはいはじ。おくれたるやうに取沙汰（トリサタ）も口惜」〔西鶴・五人女・四・五〕

◈**按摩取**　ここは按摩の術を行なう人。あんま。「都にしれたる末社、按摩取」〔西鶴・胸算用・三・一〕「あんまとりいびきをきくと手ぬきをし」〔雑俳・柳多留・一二〕

◈**老女かるも**　「海士の刈る藻」〔謡曲・藤戸〕をもじって「按摩のかるも」としたもの。ここではじめて登場する人物。謡曲藤戸の前シテ「浦の男の母」に相当する。

◈**はち巻**　この姿は、病気であることを示す。「としはたちばかりのかねつけたる男わつらひ、はちまきして打ふし」〔咄本・私可多咄〕

◈**枕刀**　護身のために枕元に置いておく刀。枕太刀。「小藤次二言なくむくとおきあがり。帯取て引しめ。枕刀ぼつ込おみのが小がいな取てねぢあげ」〔南嶺・龍都俵系図・二・一〕

◈**詞を出し**　話すこと。「Cotobauo faqu,1,idasu.（言葉を吐く、または、出だす）話す」〔日葡辞書〕

◈**蟄居**　家の中にとじこもって外へ出ないこと。また、田舎にしりぞいていること。「我はしばらく禁裏をさけ、いづれへなりと蟄居せん」〔浄瑠璃・妹背山婦女庭訓・一〕

◈**異説**　ここは怪しげなうわさ。変なうわさ。「何事も珍しき事を求め、異説を好むは、浅才の人の必ずある事なりとぞ」〔徒然草・一一六〕

◈**万一の事**　ここは病死すること。「只憐べきは孫女。もし万一の事あらば、吾儕が血脉忽絶へて」〔咄本・塩梅余史（馬琴撰、寛政十一年序）〕

◈**御念**　お心づかい。ご配慮。また、ねんごろなこと。からかいの気持で用いることもある。「おつれはないかひとり身か、ここの処が聞たい迄、ヲヲいかにもよい御念、つれは女一人」〔浄瑠璃・松風村雨束帯鑑・三〕

◈**御意**　お考え。おぼしめし。「御懇意なる御意の」〔南嶺・教訓私儘育・四・二〕

◈**性根**　正気。「お松自害いたし。おも手ゆへ性根つき申さぬを。外療内療のかげで。漸と心つき只今物申すと聞て。」〔南嶺・忠盛祇園桜・四・二〕

◈**及ぶといなや**　……と同時に。……とすぐに。ただちに。「大晦日の朝めし過るといなや羽織脇ざしさして」〔西鶴・胸算用・二・二〕

◈**身ぶるひ**　寒気や恐怖、また、激しい感動や怒りなどのために、からだがふるえうごくこと。戦慄。「身ぶるひして、世のからき事を語る」〔西鶴・一代男・六・三〕

◈**病症**　病気の症状。病状。「是は何とも合点のまいらぬ病症」〔咄本・軽口出宝台（享保四年刊）〕

◈**中の口**　中口。中央にある入口。なかのくち。「中口の明ずの門、砕けてのけと扉をたたき」〔近松・傾城反魂香・上〕

◈**時計**　明治以前の時計は、不定時法に合わせるため基本的な機構は西洋のものをを模倣しながら独自に工夫を加えたもので、独創的な機構をもつものか多くあり、工芸的に見てもきわめて優美なものが多かった。

◈**四つ半**　午後十一時ごろ。

◈**ふるひつく**　ふるえがおこる。身体がぶるぶる震える。「首引きぬいても今取る」と、いはれしを聞れましてから、亭主は震（ふるひ）つかれまして、今に枕あがりませぬ」〔西鶴・永代蔵・五・二〕

◈**程有まじ**　「程」は時間。まもなくである。「汝等も知るごとく夫人（ぶにん）が胎内に、十月（とつき）にあたる我が子有り。誕生も程有るまじ」〔近松・国性爺合戦・一〕

◈**七五三縄**　注連縄などとも書く。一定の界域中へ入らせないように張りめぐらす縄。その形式について『貞丈雑記』一六には「しめ縄の事　わらにて左縄になふ也。なひながら所々に七五三のわらを下る也。三筋下て間を置て五筋さげ、又間を置て七筋下げ、又間を置て三五七三五七とさげる也。縄の両端を切そろふ事なし。其のまゝ置也。是取つくろはず直なる姿也。七五三のわらの間々にはゆふしでを下る也」とある。「このたきの上に七五三縄（しめなわ）を張（はり）」〔歌舞伎・鳴神〕

◈**方壱尺**　一尺四方。「左右には方九尺なる、茅葺の仏堂の、二座並びて建りける」〔馬琴・八犬伝・九〇回〕

◈**員**　数に同じ。「死をいたすもの員（かず）をしらず」〔南嶺・龍都俵系図・三・三〕

◈**病気すね心に任せず**　のちに出る「すねこし立ぬ」と同義であろう。病気のため足腰が思うままに動かない。

◈**珊瑚珠**　珊瑚を加工、細工して装飾用に作った玉。ここは（皿が）珊瑚珠のように細かくくだけて、の意。「珠数にかず読し珊瑚珠を売て、何かなとおもふ折ふし」〔西鶴・一代男・二・六〕

◈**鉄槌**　「かなづち　鉄椎・鉄槌」〔書言字考〕「雷でも鉄槌（かなづち）でも」〔馬琴・高尾千字文〕

◈**天下無双**　この世で唯一。比べるものがないこと。「我等下人に天下無双のうつけものあり」〔咄本・寒川入道筆記〕

◆**しめを引**　注連縄をひきわたすこと。「御祭の御清めするなりとて、しめ引きめぐらして」〔宇治拾遺・一〇・六〕「堅く門戸を閉ぢて、七重に七五三（しめ）を引四門に十二人の番衆を居（すゑ）て、毎夜宿直（とのゐ）蟇目をぞ射させける」〔太平記・三二・直冬上洛事〕

◆**格**　同じような仕方。流儀。手段。「今のまんざいの格で、栗うりの柴うりのと丹波から東へ出る老は多し」〔近松・大経師昔暦・下〕

◆**どぎつき**　不安で心が動揺する。胸がどきどきする、むなさわぎする「まちゐたる心とはかくべつにちがひ、むねもどきつき」〔浮世草子・薄紅葉・一〕

◆**鯨の牡丹骨**　未詳。

◆**雪点草にて煮れば**　未詳。

◆**下地**　本来の。もともとの。ここは本物の意。「庭さきには。下地よりある沼池をしつらひ」〔南嶺・忠盛祇園桜・四・一〕

◆**すねこし**　臑（すね）と腰。足腰。主として、立居・歩行の意のままにならぬさまをいう文脈に用いられる。「長五郎がこはふて出ぬか、脚腰（すねこし）が立ぬか出をらぬか」〔昔米万石通・上〕「臑腰（すねこし）が立たぬ」〔譬喩尽〕

◆**是非もなや**　どうしようもないことに。「思へば腹も立つ、憎い女め、エヽ是非（ぜひ）もなやと」〔近松・出世景清・二〕

◆**藤といへる女**　初登場。かるもの娘。

◆**小庭**　小さい庭。狭い庭。「一間隔てて近習の人々鷹匠犬引勢子（せこ）足軽、玄関の小庭に居余り」〔近松・宵庚申・上〕

◆**飛石**　庭園の通路に、少しずつ間隔をおいて配置された敷石。平たい自然石や切石を用い、また古い石臼を用いることもある。露地（ろぢ）の通路に配置された渡り石は、露地の中で最も重要な景物とされる。「何かは白州の飛石を、下より噴々（むくむく）刎返せば」〔播州皿屋鋪〕

◆**どうど**　大きな重い物が落ちたり倒れたりして強く当たる音、また、物を強く当てる音や、そのさまを表わす語。「我を忘れてどうと坐し」〔播州皿屋鋪〕「板二三枚引のけてどうど落るは、石部の八蔵われと胸板つき通し」〔南嶺・丹波与作無間鐘・三・三〕

◆**ぶちわつたるで**　たたき割ったので。「ぶちわる」は「うちわる」の転。「荷の中にある大ざらを一ツとりだし、さんくにぶちわりければ」〔咄本・軽へそ順礼（延享三年刊）〕、「で」は格助詞に由来する接続助詞で、原因、理由を表わす。…ので。近世に現われる。「お暇が出たで去にまする」〔浄瑠璃・心中二腹帯・三〕

◆**きめかゝれば**　しかりつけたところ。強く責めたところ。「此うへにいぢむぢいはゞ。その方ともに土だんへ直すがときめかゝれば」〔南嶺・私儘育・四・二〕

◆**麁相な事**　あやまち。失敗。しくじり。「下男おかしがりて、手まへの麁相でござる。かんにんして」〔南嶺・私儘育・四・三〕

◆**一つ二つ三つとよみ九つとよみおはる時**　このあたり「鉄山是にて数取すると、床几にどつかと腰打ち掛、サア読め。アイ、一ツ。二ツ。二ツ。三ツ。三ツ。四ツ。四ツ。五ツ。五ツ。六ツ。六ツ。七ツ。七ツ。八ツ。八ツ。九ツ。九ツ。何（ど）うじやもうないか。テモめんえうな。幾度読んでも同じ事。皿が足らねば汝がそつ首討放すに、サ誰が点の打ち手がある」〔播州皿屋鋪〕を生かしている。

◆**取て引きよせ**　つかまえて引き寄せ。「取て引き寄せ、弓手の肋骨ぐつと突き込み一と刳り、うんと仰気（のつけ）に七転八倒」〔播州皿屋鋪〕

◆**引しき**　「引（ひつ）しく」は「ひきしく（引敷）」の変化した語。「仇も敵も一つ悲願南無阿彌陀仏と言はせも敢へず取て引っ敷」〔近松・女殺油地獄・下〕

◆**ぶちおとし**　「うちおとし」の転。「せんぎするに及ぬやつと、首ぶちおとし、死がいは川へつきはめたり」〔南嶺・忠盛祇園桜・三・三〕

◆**自然の底なし**　「じ」「ねん」は、それぞれ「自」「然」の呉音。もともとの。人為の加わっていない。「われも欲せざるより自然（じねん）に其事たへたるなり」〔庭鐘・繁野話・五〕なお死骸を井戸に捨てるのは、「末期の水は勝手に食へと、傍の井戸へ死骸を打込み」〔播州皿屋鋪〕とあるのを生かしている。

◆**名水**　名高い清水。茶の湯などに適する良質のいずみ。「Meisui メイスイ（名水）。Na aru mizzu.（名ある水）非常に良い水」〔日葡辞書〕「是ぞ日本に七所の名水（めいすゐ）と、干してむすびあげ」〔西鶴・俗つれづれ二・一〕。狂言「清水」では、主人が冠者に近日茶の湯をするので、「野中の清水」の水を汲んでこいと命じている。

◆**つきはめさせ**　突き落とさせ。突いて投げ入れ。「綾小路にて、夜中に殺され、死がいは井戸につきはめたり」〔南嶺・魁對盃・四・三〕

◆**なぶりごろし**　もてあそびながら殺すこと。「わしゆへ死んだ人々の恨の念もはるる為なぶりごろしにして下さんせ」〔浄瑠璃・津国女夫池・二〕

◆**きこえませぬ**　理不尽である。「やあら聞（きこ）えぬ旦那殿」〔近

松・曾根崎心中〕

◈**一念**　ひたすらに思いこんだ気持。執心。執念。「御なげきも深かるべし、されども一念かけし、彌兵次をうたでは置まじ」〔西鶴・諸国はなし・三・七〕

◈**黄なる声**　高く鋭いこと声。「おもいもよらす、尻ツへたを、わんとかまれ、かの男黄色な声」〔咄本・再成餅（安永二年刊）〕

◈**すゝきのすこしこなたの井戸のふかみに死骸をふかくかくせしなり**　この前後「藤戸」の「あれに見えたる浮き洲の岩の、すこしこなたの水の深みに、死骸を深く隠ししなり」をふまえる。

◈**おじめ**　穴に口ひもを通し、袋、巾着、印籠などの口を締めるもの。多く球形で玉、石、つの、象牙、金属、さんごなどで作る。緒止め。「取出したは青玉の対の緒〆（ヲジメ）」〔談義本・古朽木・三〕

◈**つぎめのしるし**　継ぎ目の参内の際に、家督相続権者であることを保証する家重代の宝物など。

◈**見合せ**　実施を中止して、しばらく様子を見ること。時機を待って実行をしばらく取り止めること。「一銭もなければ腰かけを見あはせ」〔西鶴・永代蔵・一・三〕「緒言は折々見合にすべき物なり」〔浮世草子・元禄大平記・五・四〕

◈**いか様**　いかにも。そのとおり。相手の意見を肯定して感動的に応答することば「『定て汝が行くであらう』『いか様、誰彼といふて外に人も御ざらぬに依て、定て私が参るでは御ざらうが』」〔虎寛本狂言・素袍落〕

◈**白にかづかするとりもちロ**　「白」はとぼけていつわること。知らん顔をして口裏をあわせること。

◈**手をこまぬひて**　漢語「拱手（キョウシュ）」から。「拱手」はもと両手を胸の前で重ね合わせて行う礼。転じて、手を出さず、何もしないでいる。事の処理や対応ができず、考え込んだり、困惑したり、断念したりするときなどのさまをいう。「実盛始終手を拱（こまぬき）、人々の愁歎に涙とうかむ」〔浄瑠璃・源平布引瀧・三〕

◈**打かくる時計のしらせは九つ**　「九つ」は夜半の正刻（子の刻）。深夜〇時。

◈**家鳴し**　家屋が鳴り動くこと。また、その音。「家鳴り震動空掻曇り、俄に降来る雨の脚。何所へ逃げんも真の闇」〔播州皿屋舗〕

◈**庭の井の内ぱつともゆる火はまぼろし。女の声にて**　「時に怪しや、梢に風荒れ勢動して、釣瓶の上に燃上る氤氳（ゐんうん）たる心火の光り、井筒の中よりお菊が声。……掻き消す如く井筒の上に、くはつと燃え立つ猛火の烟」〔播州皿屋舗〕

◈**りきめども**　からだに力を入れても。「心は目でつかふ、手は胴にてつかふ、扇子は、手、足ひとつなり、腰すはらねば、よはく見ゆる、心をいるると云を、息ごみとおもふゆへ、りきむ」〔わらんべ草・二〕

◈**まなこすはり**　目が据わり。じっと一点を見つめて目の玉が動かなくなる。酒に酔ったり怒ったりしたさま。「眼据（すは）り息ざし荒く、美しき姿はなくて、凄まじき躰相」〔其磧・傾城禁短気・一・四〕

◈**かたちすくみて**　顔がこわばって。「五体すくみたるやうに取しめられ、まつひら御免あやまり入しといふに」〔南嶺・花襷巌流島・四・三〕

◈**七顛八倒**　苦しがって転げ回るさま。「アヽかはゐやと。ぐっと突く。うんと手足の七顛八倒（しってんばったう）」〔浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵・五〕「弓手の肋骨ぐつと突き込み一と刳り、うんと仰気（のつけ）に七転八倒」〔播州皿屋舗〕

◈**たへいり**　気絶して。気を失って。「われは、さは、のどかはきて、絶（たえ）いりたりけるにこそありけれ」〔宇治拾遺・七・五〕

◈**井筒**　木や石などでつくった井戸の地上の囲い。円形、方形がある。井戸側。化粧側。井桁（いげた）。「筒井つのゐづつにかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに」〔伊勢物語・一三〕「内井戸、石の井筒（ゐづゝ）に取りかへ、人の物からるゝ程は取りこみ」〔西鶴・永代蔵・六・四〕

◈**ゐんせう**　漢字は「煙硝・焔硝・塩硝」などをあてる。硝酸カリウム。その鉱石を硝石といい、針状をなすものを芒硝という。炭・硫黄と混じて、火薬を作る。「硝嗅（ゐんしやうくさ）い鉄炮（てつぽう）の罪障（ざいしやう）生滅申是は俗名鑰（かぎ）やのおつめ」〔浄瑠璃・鎌倉三代記・八〕

◈**尾上菊五郎**　初代。江戸時代中期立役の名優。幼名竹太郎。享保二年（一七一七）京都で生まれた。父は都万太夫座の出方音羽屋半平。若女方尾上左門の弟子となり、同十五年十一月、京都榊山座で初舞台をふむ。はじめ若衆方、のち若女方にかわり、『鳴神』の雲の絶間姫などに好評を得た。宝暦二年（一七五二）さらに立役に転じ、以後、江戸・上方の舞台を歴勤、「忠臣蔵」の大星由良之助のような実事を得意として、天明元年（一七八一）には極上上吉と評価されるに至った。同三年十二月二十九日、大坂で没。六十七歳。生玉寺町浄運寺に葬られる。

◈**ばけ物にうでだてはふぐを丸焼にして喰も同前**　「うでだて」は腕

力自慢。腕力をたのんで争うこと。化け物に腕力で対抗しようとするのは、フグを丸焼きにして食うのと同様、きわめて危険である、ということ。「V dedateuo suru.（腕立てをする）腕力の非常に強いことを誇ったり、人前に示したりする。」〔日葡辞書〕

◆**御無用**　無駄である。やめたほうがよい。狂言「清水」に何度も出る語。「いかに狂言なればとて。色事をさきだて。見物衆をそゝのかす様な芸は御無用ととがめ」〔南嶺・教訓私儘育・一・二〕

◆**得心**　納得。「あの高綱殿にてなきと得心し。いよ〳〵心をかせりける」〔南嶺・魁對盃・五・一〕

◆**跡をも弔ひ**　謡曲・藤戸の「なかなかにその有様を現はして、跡をも弔ひまたは世に、生き残りたる母が身をも、訪ひ慰めて賜び給はば、すこしの恨みも晴るべきに」をふまえたもの。

◆**一類**　一族。「一家一類皆〳〵袖をぬらし」〔其磧・都鳥妻恋笛・三・一〕

◆**相対づく**　互いに合意のうえで。相談ずく。納得ずく。「親の敵を討つまでと、相対づくの離別ならずや」〔近松・嫗山姥・二〕

○巻二之二

二、実や人の親の心は三十ばかりの井堀

【梗概】

あんまのかるもは実は腰元ふじの母親なのであった。三郎左の話を立ち聞きし、娘が殺されたと知るや娘を返せとせまったので、真実を告げることもできない三郎左はやむなく長櫃に押込んでおいた。そのあと、井戸へ行くと、井戸の中から女形の姿をした井戸掘り人夫の藤次があらわれる。うまくやったと三郎左はほめ、約束の金子三百両を渡すと見せかけて藤次を斬り殺してしまう。その口から秘密が洩れないようにするためである。藤次は浪人伏見関路右衛門の子であり、妹がいることを語って死んでいく。そのあと、かるもは縁の下に隠されていた娘のふじと対面するが、彼等も秘密を守るため当分このまま縁の下にいさせることになり、女中たちに知れないように食事を運ばせた。翌日、円山らが井戸を検分に来たが、藤次の死骸をふじのものと思い込み、にせの皿をもって参内することに決まった。しかし、どうやら本当の皿は三郎左が隠しており、若殿出世のために使うつもりらしい。

【校訂本文】

悪事千里をゆけども、子をば忘れぬあんまのかるもは、最前よりさし足してふすまのかげに立聞してゐたりけるが、「氷のごとくなる刀をぬひて、わが娘の胸のあたりを、さし通しさしとをされし時は、さぞ肝魂もきえ〴〵となる所を、其まゝ井戸におし入られし」との物がたり。「娘が霊魂

井戸の水底の悪龍の水神ともなりて、恨をなさんと思ふ事は、いかにもそのはづ。世間での噂いつはりならず。『むすめ藤にあはせて下され』と人をおこせば、『つかへがおこって寝てゐる』とてあはさず。がてんゆかずとこの様にあんま取に成て忍び入り、様子をうかがふ所に、娘はかげも見せず。いよ〳〵がてんゆかざりしに、最前からの物語、死んだ娘より、あとにのこりし此母がむねははりさける様な」と、おぼえずわっとなき出しけるを、三郎左衛門きゝとがめ、「何ものなればそれに忍びゐる」と声掛られ、もはやかくす所でなひと、

「今は何にか命の露をかけてまし。ありがひもあらばこそ、とてもの思ひ出なる物を、なき子とおなじ道になしてたばせ給へ」

と、人めも知らず三郎左衛門が前へふしまろび、「わが子かへさせ給へや」と、うつゝなきありさま。見るめあはれに思へども、三郎左衛門十面つくりて、

「ころせし女は扨は汝が子にて有りけるよな。よし〳〵何事も前世の事とおもひ、此金を命代と思ひ、恨をはれ候へ」

とて、百両ばかりつゝみし金子なげ出せば、

「わかきを先立てつれなくのこる老鶴の金を受て何にせん。かり初に奉公させ、やぶ入りをもまちどをに思ひしに、又いつの世にあふべき」

と、金子をなげすてたはひなきを、「アゝをと高し」。何と心得たりけん、懐中より縄取出し、取てふせていたまぬ程にくゝり、そばなる長櫃へおしこみ、鎖をおろし手をたゝけば、こしもとども返事して茶もつていづるを、

「もはやねる程に、用があらば手をたゝかん。いつもの通り四間も五間もへだてゝ、扇の間よりこちらへは人をいるゝな」

といふも此中藤をころせしに、こりはてたる腰元どもなれば、「アイ〳〵」もふるひまじりにて皆〳〵かってへ引にける。腰のたゝぬといひし三郎左衛門四方を見合せ立上り、刀をつ取手燭へ火をうつし、駒下駄はいて井筒へ立ちよれば、井筒の内よりも三十四五なる男、籠に硫黄ゐんせう、火道具いれしをわきにかゝへ、すそは水にぬれながらによっとあがりて、

「ナントよふ御ざりませふがな」

といへば

「大出来〳〵。別して尾上菊五郎でうらめしいといふた段は、おれさへぞっとした。その方は井戸堀に似あはぬ役者物真似の名人、先日この井戸の底側をいれかへるとて、その方どもに三人の井戸堀が水をさらへるとて、あるひは浄瑠璃踊くどきあだくちぐの中に、その方が役者物まね別して女形が得手ときひて、身は障子ごしに聞きとれ、それより思ひ付きてころしもせぬ腰元をころした分にして、その方をひそかに招き、昼の内はアレなる長櫃へかくし、身共がくひ物を与へ、夜に入れば、井筒へいれてゑんせうの火をもやさせ、女形の物まねで『一つ二つ九つ、ハアかなしや』と毎夜〳〵はせし故、家内から自然と取沙汰つよく、此事加古川右近へは拙者より内通し置たれば、円山殿をすゝめ、梅軒を同道して宝の皿うけ取りに来たりしなり。『宝の皿わたせよ』と、円山殿より申こさるゝはづと右近よりしらせし故に、此はかりことをこしらへをき、むかしより悪人をだまして似せ物をわたすためしはあれども、相対づくにて似せものをつかまする事希代のためし。是ひとへにその方がはたらきゆへ、真の宝をわたさゞる様になりたり」

と悦べば、井戸堀藤次かしこまり、

「此御恩賞には御約束の金子を下されませい」。

「いかにも心得た」と懐中より三百両包の金子取出し、「是うけとれ」「恭し」とよる手をとらへ、ふびんながら取てひきよせ、刀ぬくやいなやぐつとゑぐれば、

「コリヤ三郎左衛門様、御ほうびがおしさにころさっしやるゝか」

とくるしめば、

「金子は十万両でもおしまねども、をのれ下臈なれば此はかりことを人にかたらんと思ひての儀。ねんごろにあとをとふらひ得さすべし。一国のお為に死ぬる命じやありがたひと思へ」

といへば、

「わたくし腹の内からの井戸堀でも御座らぬ。父は伏見関路右衛門といふて子細ある浪人者、拙者は十五妹は十三のとし、父関路右衛門相果、妹は譜代

の家来が介抱にて都へのぼりしが、其後たよりをきかず。私は世におちて井戸ほりの世渡。父がゆづりは兄弟の者に残せし金目貫、水仙に雪輪はおやぢが定紋。をのれ立身して妹にもめぐりあはんと、道ならぬ事の様には思ひしかども、似せ幽霊の物まねをせしに、それとあかして仰せられたらば、いはぬといふは武士の子じゃもの」

となげくを、隙どりてはいかゞととゞめをさし、刀をぬぐひ上へあがり、さいぜんの長びつよりあんまの老女を引出し、表着をぬがせてまたしばり、

「是見よ。おたぼねたてるとあの通り」

と、くだんの小袖を井戸堀にきせて足を取てさかしまに、井筒の中へどんぶりのこゝも八つの鐘ふけて、空おそろしき手わざなれ。くだんの老女が口を手拭にしめあげ、「あはするものあり」と我寝所のふとんたゝみをかきあぐれば、下より出るこしもとの藤にも俄にさるぐつわ。母はそれととびたつばかり、三郎左衛門をふしおがみ、物言ひたふてふもおし鳥の初ておどろくばかりなれ。

「ヲヽ道理〳〵此様子申しきかすもがてんなれども、うれしさに声たてゝは大事のさまたげ。此一埒すむ迄は母とても帰しがたし。太義ながらこの下にしのぶべし。食物は身が心得にて飢渇させじ」

と、両人がさるぐつわ取て下へしのばせ、畳を敷て庭の血を砂にまぎらし、又思案して

「にはかにばけ物がやめに成てもすまぬ道理」

と、しきりにたゝく手を聞きつけ、腰元ども「アイ〳〵」と、「侍どもをよべ」との詞に若党中小姓、「御用で御座りまするか」と来るに

「アヽラ苦しや。藤がおんねん井戸をはなれ、身に取りつひたか無念やな」と、あるひはいかり或はなげき、

「ヨウむたいにころしやったノウ。一つ二つ三つ四つ五つ六つ七つ八つ九つハアかなしやノウ」

と、もだへくるしみ「茶漬くはふ」といへば、俄にこしらへて持てくると物くふ内へ、「こしもと壱人の外は次へしりぞけ」と、食つぎ共にのこさせ「茶がぬるひ、わかさせい」と、腰元も追やり、其間に畳おしあげ、食次を下へ通はせ「早うあけて」と取あげて畳をしく所へ、「お茶があつふなりました」ともつて来れば、「食取てこひ」となげだす食次、こしもとは見てびつくりすれば

「アゝラくるしや、ゑんぶ恋しや、せうねつの苦しみ故いかふ腹がへった。アゝラひだるしや苦しや」

とためいきつけば、腰元もうなづき、「おひとり身とはちがふ。そのはづ〳〵」と懐胎な者同前のあいさつして、後には箸さへ二膳づゝすへて、又此取りざたに世上のはなしのたねぞ増ける。

夜あくれば念の為とて、有馬円山入道明石梅軒同貫左衛門を連れて井戸あらために来たり。「亭主は物怪におかさるゝ由、対面に及ばず」と井戸ある所へつゝと通りのぞひて見て、「ふびんや、うたがふ段ではない。女小袖さか様にはめたると見えて両足が見ゆる。頓てかくれはなき跡を見分したればおちついた。三郎左衛門に別心なし」と打ちつれ皆〳〵かへられける。

三郎左衛門は方寸の謀にてあぶなき所をのがれて、願ひのまゝにやす〳〵と彼皿をかくし〳〵て、かのさらをかくし〳〵て、若殿立身の種となしぬ、若殿立身の種とぞなしにける

◆**悪事千里をゆけども、子をば忘れぬ**　「悪事千里を行けども、子をば忘れぬ親なるに」〔謡曲・藤戸〕による。「悪事千里」は『北夢項言』の「好事不出門、悪事行千里」による。悪いことはたちまち世間に知れるということ。

◆**氷のごとくなる刀をぬひて、わが娘の胸のあたりを、さし通しさしとをされし時は、さぞ肝魂もきえ〳〵となる所を、其まゝ井戸におし入られし**　「氷のごとくなる、刀を抜いて胸のあたりを、刺し通し刺し通さるれば、肝魂も、消え消えとなるところを、そのまま海に押し入れられて」〔謡曲・藤戸〕による。

◆**井戸の水底の悪龍の水神ともなりて、恨をなさんと思ふ事は**　「藤戸の水底の、悪竜の水神となつて、恨みをなさんと思ひしに」〔謡曲・藤戸〕による。

◆**つかへ**　「支・悶・障・店」などの漢字をあてる。胸にさしこみの発作が起こる病気。しゃく。「病　ツカヘ〔活法〕気結而下通也」〔書言字考〕「おなじみの池田や小さの。急につかへか発りました」〔南嶺・丹波与作無間鐘・四・一〕

◆**今は何にか命の露をかけてまし。ありがひもあらばこそ、とてもの思ひ出なる物を、なき子とおなじ道になしてたばせ給へと、人めも知らず三郎左衛門が前へふしまろび、わが子かへさせ給へやと、うつゝなきありさま。見るめあはれに思へども**　「いまはなにかに、命の露をかけてまし、ありがひもあらばこそ、とてもの憂き身なるものを、亡き子と同じ道に、なして賜ばせ給へと、人目も知らず伏し転び、わが子返させ給へやと、現なき有様を、見るこそあはれなりけれ（今はなにをたよりにはかない命をつなごうぞ。生きている甲斐ももはやないのだ。どうせ生きていてもつらいことばかりのこの身なのだから、亡き子と同じようにいつそ殺して下され、と人目もはばからず付しまろびつつわが子を返してくれと、正気を失っている様子は見るのもあわれなほどであった）」〔謡曲・藤戸〕による。

◆**十面**　渋面に同じ。不愉快そうなにがにがしい顔。しかめづら。渋面顔。「海老の高き事を申せば、親父十面（じふめん）つくりて」〔西鶴・胸算用・一・三〕

◆**ころせし女は扨は汝が子にて有りけるよな。よし〳〵何事も前世の事とおもひ、此金を命代と思ひ、恨をはれ候へ**　「さては汝が子にてありけるよな、よしよしなにごとも前世のことと思ひ、今は恨みを晴れ候へ」〔謡曲・藤戸〕による。

◆**わかきを先立てつれなくのこる老鶴の金を受て何にせん。かり初に**

奉公させ、やぶ入りをもまちどをに思ひしに、又いつの世にあふべき　「若きを先立てて、つれなく残る老鶴の、眠りの中なれや、夢とぞ思ふ親と子の、二十余りの年並み、かりそめに立ち離れしをも、待ち遠に思ひしに、またいつの世に逢ふべき」〔謡曲・藤戸〕による。「老鶴」は老人が茫然として過ごすさまを表現した『和漢朗詠集』の都良香の詩句による表現。

◈**やぶ入**　正月と盆の一六日、あるいはその前後に、奉公人が主人から暇をもらって実家に帰ること。また、その日。その頃。特に正月のものをさし、七月のものは後の藪入りということが多い。宿入り。宿おり。宿さがり。「長吉が親里へ五年ぶりでのやぶ入」〔咄本・歳旦話（天明三年刊）〕

◈**たはひなき**　正気がない様子。思慮分別をなくした状態。「気はつけ共うつとりひよんと成てたはひなく、ころりとこけてねいれば」〔南嶺・大系図蝦夷噺・四・三〕

◈**アゝをと高し。何と**　「ああ音高しなにとなにとのう」〔謡曲・藤戸〕による。

◈**取てふせ**　取り押さえて。「もう叶はぬと抜てかゝるを。かいくゞつて取てふせ」〔南嶺・丹波与作無間鐘・四・三〕

◈**いたまぬ程に**　傷を付けないように。「借屋中のかゝさま達にまかせます程に、何とぞいたまぬやうに」〔西鶴・織留・四・一〕

◈**四間も五間もへだてゝ、扇の間より**　扇には「あふ」がかかる。

◈**此中**　ある期間のなか。この間。「此中（このぢゆう）の銀子（ぎんす）を、今済（すま）してくだされい」〔西鶴・織留・四・二〕

◈**こりはてたる**　すっかり懲りている。「遠国の傾城の曽而（かつて）おかしからぬにこりはてゝ」〔西鶴・一代男・五・七〕

◈**かって**　勝手。台所。「勝手は煙立つづき、亭主は置炬燵を仕掛、女房は濃茶立て」〔西鶴・織留・一・一〕。

◈**手燭**　燈火器の一種。燭台に柄をつけて持ち歩きに便利にしたもの。手燈台。てとぼし。てそく。「Texocu　テショク（手燭）Tetodai（手灯台）に同じ。」「Tetodai　テトウダイ（手灯台）手で持つ燭台」〔日葡辞書〕。

◈**駒下駄**　男女の履物の一種。台、歯ともに一つの木材から剖（く）ってつくったもの。もとその割り方が駒爪形であったところがらいう。桐、杉などでつくられ、台に管をつけたものや、木地を塗ったものなどがある。下駄。「お菊が見廻ふ駒下駄に飛石伝ふ足音の。サア是ぢやと飛立つばかり」〔近松・寿の門松・中〕

◈**硫黄**　黄色、無臭のもろい結晶体で、熱すると溶解し、点火すると青い炎を出して燃える。火山地帯に多く産し、火薬、マッチ、薬剤として用いる。「嶺より硫黄の燃え出づるを」〔近松・平家女護島・二〕

◈**ゑんせう**　二の一に既出。「積累ねたる薪には、硫黄（ゆわう）焔硝（ゑんせう）をまじへたれば」〔馬琴・美少年録・一・二〕

◈**火道具**　鉄砲などの火を発する道具。

◈**ナント**　軽い呼びかけの言葉。「なんと徳兵衛痛みはよいかと。ごつ〳〵咳（せ）いて来る」〔近松・重井筒・中〕

◈**大出来〳〵**　上出来。よくやった。「これはみなさま、大出来〳〵。めで度一ツ〆ませふ」〔咄本・俳諧百の種（文政八年刊）〕

◈**別して**　特に。「別して禁ずべきは親子兄弟、あるひは篤実なる人の並居る中でさし合咄」〔咄本・軽口五色帋（安永三年刊）〕

◈**役者物真似**　役者の声色をまねするもの。地物真似と対。「道の間を暫（しばら）くも口只（たゞ）置くは恥らしく。役者（やくしや）物真似（まね）地の物真似。小歌浄瑠璃口てんがう」〔近松・油地獄・下〕

◈**浄瑠璃**　平曲・謡曲などを源流とする音曲語り物の一つ。室町時代の末に、広く民衆に迎えられた琵琶や扇拍子を用いた新音曲の中、牛若丸と浄瑠璃姫との恋物語を内容とする「浄瑠璃物語（十二段草子）」が流行したところがら、この種の語り物の名となったもの。のちに、三味線の伝来とともにこれに合わせて語るようになり、江戸初期には人形あやつりと結んで人形芝居が成立した。

◈**踊くどき**　盆踊りに用いられる歌で、歌詞が物語になっているもの。戦国町代の木遣口説から生まれた。「躍口説（ヲドリクドキ）舟歌とかはり、上手下手さまざまある事なり。をどりのくどきといふ事、むかしとかはり、中比よりは殊の外高上になりにたり。此くどきの詞に、儒道を先だて仏教をしめし、又神道をあらはす。詩歌の心をふくませ、且和漢の古事を引き出すことおほかり。詞さへおぼゆれば、碓もいふべき事なめれど、音声・息継・拍子合に上手下手ありて、品品わかてり」〔色道大鏡・八〕

◈**あだくち**　「あだぐち」は、むだぐち。「されば世上の仇口（あだぐち）にも。奴（やつこ）々何するべい。お山に抱れて」〔浄瑠璃・鎌倉三代記・三〕

◈**分**　仮にそうしておくこと。浮・風流三味線・「我は此世にない分

にして隠ゐるを」〔其磧・曲三味線・一・五〕
◆**一つ二つ九つ、ハアかなしや**　前章でも引いたように、『播州皿屋鋪』のお菊の幽霊があらわれるときの決まり文句。
◆**むかしより悪人をだまして似せ物をわたすためしはあれども、相対づくにて似せものをつかまする事希代のためし**　「昔より今に至るまで、馬にて海を渡すこと、希代の例なれば」〔謡曲・藤戸〕をふまえたもの。
◆**井戸堀藤次**　いわゆる「芋掘長者」の昔話は、長者説話の一つで、貧しく愚かな男が毎日芋を掘って暮らしているが、そこへ押しかけ嫁がきて山中の石ころ（実は金塊）の価値を教え、長者になるというもの。その主人公を「芋掘り藤五郎」とするもののほか、炭焼き小五郎、炭焼き藤太、金売り吉次等の同型の話が色々ある。「芋掘藤次」という例は確認し得ていないが、そのもじりとみるべきか。
◆**ふびんながら取てひきよせ**　「不便には存じしかども、取つて引き寄せふた刀刺し」〔謡曲・藤戸〕による。
◆**をのれ下臈なれば此はかりことを人にかたらんと思ひての儀。ねんごろにあとをとふらひ得さすべし**　「下郎は筋なき者にて、またもや人に語らんと思ひ」「かの者の跡をも弔ひ」〔謡曲・藤戸〕による。
◆**腹の内から**　生まれつき
◆**伏見関路右衛門**　ここのみに出る名前。
◆**介抱**　世話。保護。「おことは一先づ御妹を介抱（かいはう）し。海登（かいどう）の湊（みなと）をさして落ちよ」〔近松・国性爺合戦・一〕
◆**世におちて**　落ちぶれて。「もとは浪人ものゝよしなれども、世におちて此山にとゞまり、山中の功者ぶんとなりけるが」〔南嶺・大系図蝦夷噺・五・一〕
◆**ゆづり**　譲り受けたもの。相続したもの。「親のゆづりをうけず、其身才覚にかせぎ出し」〔西鶴・永代蔵・一・一〕
◆**金目貫**　金製の刀の目貫。こがねのめめき。「仕合（しあはせ）と猿の口より金目貫」〔西鶴・織留・二・一目録〕
◆**水仙**　紋所の名。水仙の花と葉を種々にかたどったもの。水仙の丸、抱き水仙などがある。
◆**雪輪**　紋所の名。雪片の六角形をまるくかたどって図案化したもの。
◆**定紋**　家々できまっている紋。それぞれの家で…いる紋。また、その人がきまって用いる紋。家紋。「羽二重もまぜて郡内のしまつして着ぬ浅黄裏。くろはぶたえへの一張羅定紋丸に蔦の葉の」〔近松・天の網島・中〕
◆**武士の子じゃもの**　「我も武士の子成ものをと、これを名残の一言にして」〔西鶴・武家義理・四・四〕
◆**おたぼねたてる**　前回巻一の三で未詳とした「ほだぼね」（「につくい女めがほだぼね、木馬責」）と同じ語か。おだ（＝勝手なことを得意になっていうこと）と同義か。
◆**どんぶり**　どぶん。「あつたら西瓜を、井戸の中へどんぶりと落した」〔咄本・うぐひす笛（天明頃刊）〕
◆**八つの鐘**　今の午前二時頃（丑八つ）。
◆**おし鳥**　「鴛鴦」と「唖」が掛かっている。
◆**一埒**　「埒」は物事の区切り。ひとくぎり。
◆**飢渇**　うえること。「五穀みのらず、万民飢渇（きかつ）に及びし刻（きざみ）」〔近松・国性爺合戦・一〕
◆**食つぎ**　飯櫃。めしわんにつぐ飯を入れておく器。飯鉢。めしびつ。「雪の日、風の立つ時は食つぎを包みをき」〔西鶴・五人女・二・四〕
◆**ゑんぶ恋しや**　「ゑんぶ」は閻浮提。もとインドの地を想定したもので、のちに人間世界、現世を意味するようになった。「座敷の内は暗（くら）きより暗（くら）きに迷ふ枕元。あら閻浮（ゑんぶ）恋（こひ）しや懐（なつ）かしの御僧や。我は是（これ）過ぎつる菊月に世を取り失ないし。大吉屋の松右衛門が霊魂」〔浮世草子・新色五巻書・五・一〕の例からもわかるように、「ゑんぶ恋しや」は幽霊の常套句。
◆**ひだるし**　飢えてひもじいさま。「今といふ今、喰はねばひだるいといふ事を知つて」〔其磧・禁短気・四・四〕
◆**懐胎**　このまま「かいたい」と音読する例が多い。馬琴は「みごもる」と訓を付している。「三年の間（あはひ）には、かならず懐胎（みごもり）給ひて」〔馬琴・弓張月・三七回〕
◆**別心**　相手を裏切るような心。そむこうとする気持。ふたごころ。異心。「是を別心なき申わけのしるしにせん」〔南嶺・龍都俵系図・五・一〕
◆**方寸の謀**　「方寸」は心。心は胸中方一寸の間にあるとするところから。心中ひそかに企てた計略。「軍中の機密は。将の方寸にあつて。他にもらさぬを良策といはずや」〔南嶺・魁對盃・二・一〕
◆**願ひのまゝにやすくと彼皿をかくしくて、かのさらをかくしくて、若殿立身の種となしぬ、若殿立身の種とぞなしにける**　「願ひのごとくに易々と、かの岸に至り至りて、かの岸に至り至りて、成

仏得脱の身となりぬ、成仏の身とぞなりにける」〔謡曲・藤戸〕のも　　じり。

○巻二之三

○七つ過ればすぐ出る怪物ばけものより上の工夫くふう

【梗概】

家老加古川右近の所に最近雇われた仲間の太郎助が餝間三郎左衛門の屋敷へ書状を届けるように命じられる。ばけものが出るといううわさの屋敷なのでいやがるが、命令なので出かけていく途中、円山入道と明石梅軒父子一行に出会い、書状の中味を読まれてしまう。その内容は、京都一文字屋の遊女吉野から明石貫左衛門にあてたもので、貫左衛門と言い交わしていた関係を清算し、円山に従うことを告げるものであった。太郎助の機転により、円山はすっかりその手紙の内容を信じ込み、飼犬に手を噛まれたという怒りで、貫左衛門をその場で斬り殺してしまう。父親の梅軒も、ちょうど馬で来合わせた右近に身柄をあずけられることになった。

【校訂本文】

「是は此御家中に住居いたす者で御座る。ヤイ〳〵太郎助あるかやい」「ハア」「ゐるか」「ハア」「ゐたか」「おまへにおりまする」。

「ムゝねんなふはやかつた。汝をなんちよび出す事余よの義ぎでない。夜前やぜんひそかに申しふくめし通とをりにして、此状を餝間しかま三郎左衛門のかたへ持てゆけ」

「エゝ今からで御ざりまするか」「ハテしれた事」

「申し〳〵、あの三郎左衛門様の御屋敷にはばけ物がでると申して、そとがはの通り手さへも御ざりませぬ。此御使は御ゆるされて下されませい」

「ハア扨さておく病な事をぬかす。ばけものと豆腐とうふの骨はな物じや。急ひでゆけ」「ハア」「ヱイ」「ハア」と罷りたち

「扨も〳〵おそろしい事かな。ゆかずばその分ではおかれまい。よひ〳〵思ひ切きってゆかふ」

と、右近仲間太郎助こはぐ〳〵清水縄手を通りける所へ、先供権高に払ひ来るは円山入道・明石梅軒父子也。「はつ」とつゝみの片岨へおりてうづくまれば、貫左衛門見とがめ

「その方が持て居る状箱に餝間三郎左衛門様と附札がてんゆかず。此節は円山様御うたがひの義あるゆへ、三郎左方への通達は仲間同志申しあはさねば人もやらず使もうけぬ申し合せなるに、此方どもへの相談もなく、状通とは何ものよりぞ。のみこまぬ」

といへば、円山うなづき

「いかにも是は貫左衛門申す通りじや。其状箱是へ渡せ」

とあれば、太郎助ぎやうてんして

「主人急用とてわたせし一通、おまへがたへあげてはわたくしめが、首と胴のわかれをいたしまする」

と迷惑がれば、貫左衛門とびかゝつて引たくるを、仲間ながらぬきあはせてよせつけぬを、梅軒下知して大勢立かゝり、刃物扣きおとし、堤のかたわきなる松の木にしばり付けて、状箱の封をきれば、女の髪一ふさに、あてななしの白封の状あり。ひらいて見るに文字はなく、「やるぞしらかみ文とよめ」といふ事かと、人〳〵興をさます。中にも梅軒は物事功者にて

「酒にて文をかき日にほせば白紙のごとし。是を火にてあぶれば酒にて書たる文字出ると、楠軍法重宝記といふ書に出てある儀」

と、燧こち〳〵いはせて松葉ひろいあつめあふぎたて、ふすぼりながらもゆる火に、こげぬ様と用心してあぶりければ、案にたがはずあり〳〵と文字あらはれけり。円山は大に感じ「さすが老功のかんがへ」と、さしよりよみて見れば、おもひがけなき女筆のちらしがきにて、

「御文はいしまいらせ候。まことに此はりまへくだりしは、わか殿様といふはかこつけ、まことはそもじ様と都にて申かはせしゆへ、此よあの世かけてちぎり候はんと、くだりまいらせたれども、円山さまの御ざる内はおまへの望みもかなはぬまゝ態としばられてつれて出たらば、色ふかき円山さまなれば、思ひつかるゝはしれた事なるべし。其上入こみて首尾を見あはせ、円山さまのねくびをかけとの御頼み。そのうへはおまへとわたくし夫婦になり、此国をおさめんとの仰もだしがたく、円山さまのかたへは入こみたれども、おまへより外にとかぬ心の下ひもなれば、円山様にくどかれても

がてんせぬゆへ御心ゆるされず。其うへ御ねがほを見れば何とやらん御いとをしく心にまかせず候。円山様の御心のあまり忝き品〳〵に候へば、わが身事は是までとおぼしめし切り下され候べく候。さりとて又御たのみの事人にもらし申すまじく候へども、円山様をころして一国をとらふとおぼしめしても、右近殿三郎左衛門殿など申す人が御ざ候へば御ためにはあしく候はんまゝ、ふつ〳〵おぼし召しとまり候べく候。是までのえんとおぼし召し下され候ため、わがくろかみを切ておくりまいらせ候。此後は円山さま御心にしたがひ候とも、御うらみ下されまじく候。又此つかひの者は物見の格子よりそとを通るものを、金子をやりたのみつかはしまいらせ候。かしく」

ととめたり。

円山急にせいてきて、きつは廻し油断せぬ躰。梅軒も大におどろき詞なければ、貫左衛門めいわくがり、「是はあまりむごい仕様」とあたまをかけば、しばられてゐる仲間、

「私は京の嶋原より備前の岡山迄飛脚にまいるものなるが、此御家中を通りしに格子よりよびよせられ、『此文をひそかに明石貫左衛門殿と尋ねてはかくれのない屋敷じや程に、ぢきにあふてとゞけてもらいたい』と、一歩ふたつ包んで『是を賃に』と出ししなに『見しつた男ゆへたのむ』と仰られしは、たしか一文字屋のよし野さまかと、おろせ商売のわたくし目ばやくのみ込、お文箱うけ取て見れば、『あて名がちがふて御ざりまするが』と申したれば、『此へんで貫さまのお名のたゝぬため。そのうへけふはしかま三郎左衛門どのへいて御ざるほどに、ひそかに三郎左衛門殿へゆきてよび出してわたしてくれよ』とある義。かやうに難儀いたす事とも存ぜず、ひよんな物うけ取ました」

といへば

「コリヤその貫左衛門といふは身が事じや。身に覚えもなひ事、うぬどうでもがてんのゆかぬやつ」

とはなさねば

「ハテ扨わるひおのみこみかな。わたくしはわけを存ぜぬ通りがゝりのたのまれ使。がてんのゆかぬ事もゆく事もそのふみの通りなれば、おまへのむねにある事」

と一ほんさゝれて、あとへもさきへもゆかぬいひわけ、笑止なりけるありさまなり。

こゝに加古川右近は、「新参者の太郎助器量あるやつと見立て使にやりしが、ことの外におそひ。参りて様子を見ようと存ずる」と、供廻り大勢召連騎馬にて来かゝり、馬より飛でおり

「是は〳〵円山公で御ざりまするか。今日は三郎左衛門方へ御出でとうけ給りましたが、あまりおそく心もとなく御迎ひに参りました」

といへば、円山大に悦気あつて、

「よひ所へ来めされた。忠臣といふはその方と三郎左衛門にきはまつた。皮ひとへ下の心はしれぬ物でおじやる。明石梅軒貫左衛門おや子は身が手足のごとく思ひしに、是見やれ」

とくだんの文を見すれば、右近よこ手を打、「侍ども、梅軒貫左衛門に縄かけよ」といへば、貫左衛門はらたて「是には段〴〵様子」といへども、

「いやさ様子所ではおりなひ。忝くも円山様はどなたとおもはるゝぞ。只今では播州一国のあるじ。その御主人をころせとは天命しらずめ」

と縄たぐり掛てすゝめば、円山こらへかねてぬくかと見えしが、刀のひかりと共に貫左衛門が首はまへにぞ落にける。梅軒びつくりして「こは情なし」とよる所を、うしろより右近引たをして、

「わが君円山様へちかよるは、逆心まぎれなし」

と無理無たいに取て引ふせ、高手小手にしばりて仲間どもにひかせ我屋敷へおくらせければ、円山きげんなゝめならず。

「養飼猫に手をくはるゝとはきやつ等が事。それなる飛脚の者にはとがなし。追放しつかはせよ」

とあれば、右近きいて

「いや〳〵外一まいり此沙汰いたすも心もとなし。縄をとひて世間のしづまる迄は、わたくし方に召置べし」。

「いかにもそれも尤」と、円山は立ちかへれば、「途中が心もとない。身が者どもは皆御供してゆけ」と、馬にのせまいらせのこらず送らせつかはし、あとにはひきやくの者と只二人のこりしが、四方を見あはせ「その方新参者にて人の見しらぬだけに狂言うまふいた。太儀であつた。ゐてやすめ」「ハ

ア」「エゝイ」「ハア」と、つれてわが家にかへりける

◈「**是は此御家中に住居いたす者で御座る。ヤイ〳〵太郎助あるかやい**」「**ハア**」「**ゐるか**」「**ハア**」「**ゐたか**」「**おまへにおりまする**」。「**ムゝねんなふはやかつた。汝をよび出す事余の義でない**　狂言の冒頭によくある形式。「清水」では、「『これはこのあたりに住まい致す者でござる。……まず太郎冠者を呼び出だいて談合致そう。ヤイヤイ太郎冠者、あるかやい』。『ハアー』。『いたか』。『お前におりまする』。『念無（ねんの）う早かった、汝を呼び出だすは別なることでもない」（古典大系本による）というふうにはじまっている。太郎助は太郎冠者のもじり。「ねんなふ」は思いがけず。意外に。

◈**申し〳〵、あの三郎左衛門様の御屋敷にはばけ物がでると申して、そとがはの通りでさへも御ざりませぬ。此御使は御ゆるされて下されませい**　狂言「清水」では、「七つ下がって清水へ参れば、元興寺（がごじ）（『狂言記』では「鬼」）とやらが出ると申しまするによって、これは御免なされて下されい」といってことわろうとしている。

◈**ばけものと豆腐の骨はない物じや**　似たような表現としては、「傾城の誠と卵の四角なはない」（譬喩盡）「仙人のはなしと鶏卵（たまご）の四角なはない」（南嶺・大系図蝦夷噺・一・一目録）等がある。

◈**その分**　そのまま。「実父の死がい。その分に捨置んは不忠の第一」（南嶺・丹波与作無間鐘・四・三）

◈**縄手**　田んぼのあぜ道。また、長く続くまっすぐな道。

◈**先供**　行列で先頭に立って供をする人。「旦那のお帰り、先供走る黒羽織」（近松・夕霧阿波鳴戸・中）。「町人の葬礼に（略）編笠先供の事を嘲り給ふが」（談義本・当世辻談義・三）

◈**権高**　気位が高い様子。傲岸な態度をとる様。「評判の高松ほどあつて、強気にけん高な女郎ぢやの」（歌舞妓・時桔梗出世請状・二）

◈**片俎**　片端。すみっこ。「石のそばの、折敷の広さにて、さし出たるかたそばに尻をかけて」（宇治拾遺・六・五）

◈**附札**　書類や手紙などに貼付してある紙。書類に関する指示・意見・返答などを記す。「慾のつよきかたおやぢ、大道をあるくにも、たゞはあるかず、眼くばりしてゆくむかふに、銭百文おちてあれば、是はうまいと、走りゆきしが、壱両五分とかいた付札に、南無さん、コリヤひろわれぬ」（咄本・夕涼新話集（安永五年刊））

◈**状通**　手紙を出すこと。「をさななじみの本妻さへ、王子方の者なれば状通にて縁切った」（近松・用明天王職人鑑・二）

◈**迷惑がれば**　つらいという気持ちを様子にあらわすと。「合力がはさまれてから、めいわくがり、ときどきああいたやいたやといひてよし」（虎寛本狂言・蟹山伏）

◈**仲間ながらぬきあはせて**　中間は紺の法被に梵天帯で樫の木刀一本を差すのが普通の姿であるが、ここは、その木刀で応戦しようとしたもの。

◈**やるぞしらかみ文とよめといふ事かと**　この当時「やるぞしらかみ文とよめ」という文句の俗謡がはやったらしい（旧版古典大系『歌舞伎脚本集・下』の注による）。「おもしろさやるぞしら紙金とよめ」（川柳評万句合・天明元年　礼・三・二〇・17）「やるぞ白紙文と読め、お手が鳴るなら銚子とさとれ、とはずっとむかしの事にて」（洒落本・にやんの事だ（天明元年））「『ハテ、そこが歌にも言ふ通り。』『やるぞ白紙（しらかみ）文（ふみ）と読（よ）め」といふ事だは』」（歌舞伎・名歌徳三桝玉垣・三立目）

◈**酒にて文をかき……火にてあぶれば**　あぶり出し。酒、明礬、塩化コバルト、ミカン汁などを使う。「これ今のあぶり出しといふもの也。ここにてするは酒をもて物を書き火にあぶる異国の方よりも簡易なり」（嬉遊笑覧・三・上）なお、「何此白紙が思案とは。ヲヽサ仮初（かりそめ）ならぬ密事の計略、落ちても人の見ぬ様に。此白紙認（したゝ）め置き、水にひたせば皆（みな）読める」（浄瑠璃・神霊矢口渡・二）なども参考になろう。

◈**楠軍法重宝記**　『国書総目録』には出ない書名（『楠軍法鎧桜』という享保十七年刊の八文字屋本がある）。前項『神霊矢口渡』（旧版古典大系）の頭注に引く『秘事指南車・下』（享保十二年刊）に、「白紙にて文通する術」として「白紙に酒にて文字を書き、乾して後水に入れば、書きたる文字あらはるゝ、密に文通するには、此法をもちゆべし、乾きたる時は白紙とみゆる、かねて向の人といひ合せ置べし」という記事が出ることからすれば、この種の書物を念頭におきつつ、楠正成流の軍法書の解説書といった雰囲気を持たせた架空の書名と思われる。

◆**燧**　火打石と火打金とを打合わせて発火させること。また、その道具。「素(もと)より膽太き壮佼(わかうど)なれば有恁(かかり)けれども物とも思はで、腰に著(つけ)たる嚢(ふくろ)より、燧(ひうち)を出(いだ)し火(ひ)を鑽(うち)て」〔馬琴・美少年録・二〇回〕

◆**こちく**　(副詞)硬いものをたたく音。また、硬いものどうしが触れ合う時の音。「ふくろにいれたるかづらぎの嶺／こちこちと山伏の打つ火うちいし」〔俳諧・破邪顕正返答〕「さる家の見せの下を、ぬす人、こちくこぢけるを」〔咄本・軽口若夷(寛保二年刊)〕

◆**ふすほり**　火がよく燃えないで、煙ばかりがたつ。くすぶる。「飛び入り飛び入りばっとふすぼる煙の内」〔近松・平家女護島・四〕

◆**女筆のちらしがき**　「女筆」は女性の筆蹟。「ちらしがき」は、色紙・短冊・艶書などに和歌や文の一、二句づつを、行の頭をそろえず、また、濃く淡く、太く細くなどさまざまに、また、とびとびに散らして書くもので、ほとんどの場合、女性の手紙に用いられた。「女筆(によひつ)の散らし書ことになまめく贈り物。いかさまあぢなことさうな聞かまほしゝと笑ひ」〔近松・用明天王職人鑑・二〕

◆**かこつけ**　口実。「寺子屋へ行をかこつけにして。昼寝の手枕度の重るにしたがひ」〔南嶺・今昔出世扇・四・二〕

◆**そもじ様**　「そもじ」は「そなた」の文字言葉で、女性語。それをさらに丁寧に言ったもの。「そもじ様故漕(こが)れ舟人目の岩に波せきて。砕くる磯辺床右衛門」〔近松・堀川波鼓・上〕

◆**思ひつかるゝ**　心を引かれる。好意を持つ。愛情をよせる。イ、惚れ込む。ロ、親しみ懐(なつ)く。「自然と思ひつかすしかけ」〔浮世草子・野白内証鑑・一・二〕

◆**入こみて**　もぐりこみ。「もし敵のまはしもの、下女などになつて入こみ、ちんどくなどをあたへまいものでもない」〔咄本・立春噺大集(安永五年刊)〕

◆**首尾を見あはせ**　よい機会をうかがい。「よき首尾見合せ、酒に酔出し前後覚へぬ風情」〔西鶴・一代女・一・二〕「首尾を見合せ合図を定め」〔近松・心中天網島・上〕

◆**とかぬ心の下ひも**　「下紐を解く」は、下紐を解いて衣服を脱ぐ意から転じて、男女が共寝する。特に、女性が男性に肌身を許す意。ここは、まだ肌身を許していないことをいう。

◆**品くく**　ここは、しぐさ、ふるまいや扱い方。

◆**御ためにはあしく候はん**　あなたのためによくないことです。

◆**ふつく**　ふっつりと。きっぱりと。「今より我事ふつくと思召切給へ」〔其磧・都鳥妻恋笛・四・三〕

◆**わがくろかみを切ておくり**　心中立てのひとつ。「女郎の。心中に、髪を切り、爪をはなち、さきへやらせらるるに」(『好色一代男』巻四之二)。

◆**せいてきて**　いらいらしてきて。気がたかぶってきて。「ていしゆいよくせいて」〔咄本・正直咄大鑑(貞享四年刊)〕

◆**きつは廻し**　(刀を抜くとき、左手で鞘ごと回して、刃を上に向けることから)まさに刀を引抜こうとするさま。「主に向かつて切刃をまはさるゝは、臣下の身あるまじき事」〔其磧・都鳥妻恋笛・五・三〕。「切刃をまはさるればとて、申すべき事を申すまじきや」〔南嶺・龍都俵系図・一・一〕

◆**ぢきに**　直接に。「某(それがし)参りぢきにあうて笠をわたし」〔近松・傾城反魂・中〕

◆**おろせ商売**　「おろせ」は(江戸時代、駕籠かきが「重くばおろせ」と歌いながらかついだところから)駕籠かきのこと。また、駕籠かきが寝泊まりし、詰めていた「おろせやど」の略。「有時若ひ衆にたのまれ嶋原への状壱持ってまいりけるに。賃は卸(おろせ)の並とて五分くれられける」〔浮世草子・好色盛衰記・三・三〕

◆**目ばやく**　見つけることが早い。めざとい。「佑経めばやきおのこにて」〔近松・曾我五人兄弟〕

◆**ひよんな物**　とんでもない物。思いがけない物。「なう大名の手業(わざ)にも有るべき道具の足らぬのは。ひよんな物とておむつかる」〔近松・傾城反魂・上〕

◆**うぬ**　二人称の卑語。相手をののしっていう。「屋敷家財にも。芥子ほども疵(きず)は付けまいがうぬが命に疵付ける」〔近松・重井筒・上〕

◆**一ほんさゝれて**　やりこめられて。へこまされて。「蚊柱に一本さする嵐かな　永治」〔俳諧・毛吹草・五〕「此程の返しに一本させらるるは、見へた事」〔其磧・傾城禁短気・五・三〕

◆**きはまつた**　決まった。結論が出た。「悦びに参らねども。もはや忠盛妻にきはまつた上」〔南嶺・忠盛祇園桜・二・三〕

◆**悦気**　「悦喜」と書くのがふつう。喜ぶこと。満足すること。「入道は一しほ悦喜ましくて」〔其磧・風流宇治頼政・三・二〕

◆**よこ手を打**　左右の手を打つ。感心したときなどの動作。「みな人よこ手を打て、さても頓作なる御返答やと、口をとぢてかへりける」〔咄本・一休はなし(寛文八年刊)〕

◈**おりなひ**　「おいりない」の転。「ない」の丁寧語。近世においては、田舎侍や奴など下級の武張った者のことばに多い。「此の赤松梅龍が姪などを。むさと前垂（まへだれ）奉公などに出すものではおりない」〔近松・大経師昔暦・中〕

◈**無理無たい**　無理矢理。「左（さ）いうてはことすまずと。無理無体に衣裳させ」〔近松・用明天王職人鑑・一〕

◈**高手小手**　両手を背の後ろに廻し、首から肘、手首にかけて厳重に縛りあげること。また、そのさま。「駕籠（かご）打明（うちあ）け、高手小手の縛縄（しばりなは）引（ひつ）立てて引出す」〔近松・大経師昔暦・中〕

◈**養飼猫に手をくはるゝ**　「飼犬に手を食わる」とか「手を噛まれる」などが普通の言い方。ふだんから特別大事にしてやっていて、そんなことをするはずもない者から、思いがけず害を加えられること。「思ひもよらぬかひいぬに手をくはれ給ふ御運の末」〔近松・津国女夫池・三〕「飼犬に手を噛まるる」〔譬喩盡・二〕

会員の所属一覧

木越　治	金沢大学文学部
高島　要	石川工業高等専門学校
高橋明彦	金沢美術工芸大学
村戸弥生	韓国霊山大学
木越秀子	北陸古典研究会会員
穴倉玉日	金沢大学大学院社会環境科学研究科